

エステバン・マルティン／アンドレウ・カランサ著 ^{きむらひろみ} 木村裕美訳 ^{かぎ} 「ガウディの鍵」 集英社文庫、2013 年 10 月 25 日集英社刊を読む(1)

【主な登場人物】

マリア・ジベル…美術史研究者

ジュアン・ジベル…バルセロナに住む老人。マリアの祖父

ミケル…マリアの恋人。数学者

タイマツ…マリアの友人の日本人女性。ムダルニズマの専門家

1. 「あなたが来るまえに、ふたりでガウディの話をしていたの。マリアにきいたんだけど、彼女のお祖父さま、ガウディの建築物にとってもくわしかったのね。あなたも、ガウディとフラクタル数学の関係を研究しているんですって？」

その最後のひと言に、ミケルは気をそがれた。

「タイマツに教えてあげたの。あなたが、そのことを研究中だって」

「どんな内容？あなたの説は？」タイマツがきいてきた。

ミケルは、その場で考えざるをえなかった。

2. 「うーん……じつは……まだ、はっきりしないんだけど。単なる構想というか、そこまでもいいかないな。直感というか、樹木が枝をひろげていく自然の原理を、ガウディが、サグラダ・ファミリアの柱に応用してるように思えてさ。あと、モジュール、連続性、形状のくり返し、とくに彼の作品によく見られるスケールの大きな螺旋や放物線とかね。だけど事実上なにも、まとまってないんだ。まだ手をつけたばかりで」

「そう、じゃあ、その直感がもっと形になったら、話きかせて」とタイマツが言った。

3. 「日本人は、なんでガウディに夢中になるの？」とミケルはきいた。半分は話題を変えるためだが、事実、気にもなっていた。相当な数の日本人が、ガウディの作品見たさに、毎年毎年バルセロナを訪れる。

「日本の文化は、禅の思想と深くむすびついているの。人間の活動は、どれだけ単純、素朴に見えても、すべてが完成への道なのよ。わたしたち日本人から見ると、ガウディは悟りに達したようなものかもしれない。技術を脇にやり、創造に取り組んだってことよね。指は月を指す役に立つ、でも月が見えたら、もう指を見るな、禅師たちはそう教えてくれるの。ガウディの建てた館や建物は“指”とおなじ、彼は建物をつくって、星や空や、精神を指ししめそうとしたのよ……。でも、わたしたちは指ばかり見ているわ。ガウディの後、彼につづく建築家が出なかったのは、きっとそんなこともあってでしょうね」

4. 「きみの説は、とても興味ぶかいね。欧米人には深すぎる。ぼくらはもっと表層的だから。でも、きみは、なんだかガウディしか……」

「お願い、笑わないで」

「ごめん、タイマツ、だけど、からかったわけじゃない。ガウディの建築物って、自然の映し鏡に思えるよ。ある意味、岩や木立に似てないか。日本の家屋や庭園を連想させるよな。とくに、内的雰囲気^{雰囲気}の創造、深い木立のなかの薄闇とか明暗とかをさ」

「おっしゃるとおりね。自然の芸術に重きをおいた日本文化を、ガウディは理解し共感したんでしょう。それに、ヨーロッパではマイナー・アーツの“工芸”とみなされる技術活動にたいしてもそう。日本では生粋の芸術よ。たとえば生け花とか、盆栽とか。人形浄瑠璃^{じょうるり}や能面も、立派な伝統工芸だし……。ガウディはいつも建築現場にいて、左官職人、建築助手、製図工、とくに鍛冶職人とか、石工、彫刻師みたいな手仕事をする職人といっしょに、その場その場で仕事を進めたの。こちらだとあまり注目されないけど、日本文化では工芸家も芸術家として尊ばれて、それぞれが自分の仕事に完璧さを追究しているのよ。そういう芸術の概念、大方は無名の作り手の技術工芸に、日本人は大きな理解があるの。ガウディもそれがわかっていたんでしょう」

5. 「もしかして、ガウディは鍋釜製造職人の息子だったから？ でも日本人の、その芸術観には頭が下がるな。ふつうじゃ思いつかないもので芸術をつくるわけか」

「ミケルったら、また、わたしをからかって」

「ガウディについて調べだしたって、さっきも言ったけど、自分の説をうち立てるのに必要な情報はみんな集めようと思ってね。目下、なんでも興味があるんだ。まあ、あとで取捨選択していくようだな。ガウディの進化ぶりは、ぼくも知ってるよ。彼は人生の一時期、ゴシック芸術の偉大な再発見者ヴィオレール-デュクに入れこんだりしたんだね。だけど彼自身は、このフランス人建築理論家を凌駕して、ゴシック建築の処理法が単なる支えの問題だと判断するまでになった。自然光の扱いは、ガウディにとって生命線ともいえる課題だ。1883年にサグラダ・ファミリアのプロジェクトを継ぐことがきまったとき、だから地下聖堂^{クリプタ}に修復をくわえたんだよ。前任者のビリャルがおこしたオリジナルの設計図を修正して、自然光が入るようにしたわけだ」

6. 「あなたは、マエストロのことに、相当くわしいのね」とタイマツが言った。

「まさか。ガウディは、とんでもなく複雑だよ。だめだぜ、こんどは、きみのほうが、ぼくをからかってる」

マリアは黙っていたが、正直言ってミケルの熱意に驚いた。ガウディはまるで彼の好みじゃない、建築は権力に奉仕する芸術だと、見下しているのかと思っていた。だが当のミケルは、自分が女性ふたりの目にどう映っているか、気づきもせずにつづけた。

「単に審美的要素であって、それ以上のものではないと思うけどね。ガウディは、たしかにネオ・ゴシックを起点にしている。当時主流の様式だよ。ごぞんじのように、初代のビリャルは、型どおりのネオ・ゴシックの建築表現を用いて、“貧しき人たちの大聖堂”、サグラダ・ファミリアを設計した。でもガウディは、このスタイルをはるかに超えて、もっと先を行ったわけだ。批判したり、ばかにする人もいた。折衷主義だとか、わけのわからない融合だとか、まあ、スタイルの異なるものをごた混ぜにしたというんだな。ガウディはある意味、ネオ・ゴシックから出発しているけど、

イスラム調のムデハル様式の美術も原点にあるし、ロマン主義的な雰囲気^{あつ}の建物も多い。自然の流れを直接くんだスタイルだよね」

7. 「たしかにそうね。あなたの評価には頭が下がるわ、ミケル。だけど単に審美の問題にかぎらない。ガウディはとても信仰に篤い^{あつ}人で、とくに晩年がそうだったのよ。彼の建築は、彼自身の精神性を伝えてくるわ。でも、キリスト教の象徴体系のことを言ってるんじゃないの。秘教的なシンボルまで使ってるかもしれないとか、そんなことじゃなくて……。わたしが言いたいのは、ガウディの建築物そのもの、彼が生きた建物をつくったってこと。彼の建築はオーガニック、有機体なのよ。生きているの」

「そうだな。それ、どこかできいた気がするよ。昔の錬金術師も、そういえば、自分たちの窯で焼く石や金属を有機物、つまり生きものだと考えていたよな」

P215 ~ 219

[コメント]

現代スペインの最高の知識人の二人、エステバン・マルティンとアンドレウ・カランサがガウディを通して日本というものをどのように見ているのかが、スペインで大人気のこの小説「ガウディの鍵」を読むとよくわかる。木村裕美さんの訳も素晴らしい。年の暮れから新年にかけ、是非御一読を。

— 2013 年 12 月 25 日 林 明夫記 —